

研究報告

Covid-19 感染拡大に影響を受けた看護学生の不安と卒業前技術演習への要望

Concerns of Nursing Students Affected by COVID-19 Outbreak and Need for Pre-graduate  
Technical Training

山田晃子<sup>1)</sup>、吉川あゆみ<sup>2)</sup>、福井千晶<sup>3)</sup>、風間眞理<sup>4)</sup>、田中登美<sup>5)</sup>、五十嵐稔子<sup>1)</sup>

1)奈良県立医科大学 医学部看護学科、2)大阪歯科大学 看護学部看護学科、3)奈良県立医科大学附属病院 看護実践・キャリア支援センター、4)目白大学 看護学部看護学科  
5)大阪成蹊大学 看護学部

Akiko Yamada<sup>1)</sup>、Ayumi Yoshikawa<sup>2)</sup>、Chiaki Fukui<sup>3)</sup>、Mari Kazama<sup>4)</sup>、  
Tomi Tanaka<sup>5)</sup>、Toshiko Igarashi<sup>1)</sup>

1)Faculty of Nursing School of Medicine, Nara Medical University 2)Faculty of  
Nursing, Osaka Dental University 3)Nursing Career Support Center, Nara  
Medical University Hospital 4)Faculty of Nursing Mejiro University  
5)Faculty of Nursing Science Osaka Seikei University

要旨

目的：新型コロナウイルス感染症は看護学生の実習や技術演習時間に影響を与えた。本研究は、卒業前の看護学生の技術演習に対するニーズと、卒業前演習への参加の違いによる卒業後3か月の不安を明らかにすることを目的とした。方法：2022年3月に大学を卒業した看護学生76名を対象に、卒業前と卒業3か月後に質問紙による縦断調査を実施した。結果：卒業前調査は72名、卒業後調査は16名を有効回答とした。就職進学の不安の内容は、卒業前と卒業後ともに看護技術が最も多かった。卒業前の技術演習では、より高度な看護技術の希望が多かった。卒業前技術演習の参加の有無による卒業3か月後の状態不安尺度平均得点の違いには、有意差を認めなかった。考察：看護技術に対する不安が高い学生が多く、感染症拡大に伴い、実習で看護技術の実施機会が減少したことが影響していると考えられる。結論：卒業前の技術演習項目は、実習で扱う機会が少ない、より高度な看護技術の必要性が示された。

キーワード：Covid-19、看護学生、看護技術、不安

Abstract

Objectives: The COVID-19 pandemic has disrupted hospital practices and technical training opportunities for nursing students. This study aimed to identify pre-graduation nursing students' need for technical exercises and assess their anxiety levels three months after graduation, based on their participation in pre-graduation exercises.

Methods: A questionnaire-based longitudinal survey was administered to 76 students who graduated from a university nursing program in March 2022. The survey was carried out before and three months after graduation.

**Results:** A total of 72 students responded to the pre-graduation survey and 16 responded to the post-graduation survey. In both surveys, the most significant source of anxiety regarding post-graduation work performance was nursing skills. Most students wanted to practice advanced technical nursing skills before graduation. The subjects were divided into two groups based on their interest in participating in technical exercises. A comparison of the State-Trait Anxiety Inventory scores between the two groups after three months showed no significant difference.

**Discussion:** The most significant source of anxiety regarding post-graduation work performance was related to nursing skills. This anxiety can be attributed to the reduced opportunities to acquire nursing skills during hospital practice, largely owing to the COVID-19 pandemic.

**Conclusion:** Pre-graduation technical skills need to be more advanced nursing skills as these are rarely practiced by students during their education.

**Keywords:** COVID-19, nursing students, pre-graduate technical training, anxiety

## I.背景

看護学教育モデル・コア・カリキュラムでは、臨地実習を、看護の知識・技術を統合し、実践へ適用する能力を育成する教育方法であり、看護の方法について、使う、実践できる段階に到達させるためには、不可欠であると位置づけている(大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会、2017)。しかし、2020年に新型コロナウイルス感染症(Covid-19)が拡大したことに伴い、わが国の看護系大学の多くは、臨地実習の実施に大きな影響を受けた(日本看護系大学協議会、2021)。本学の臨地実習でも、臨地実習期間の短縮、学内実習への変更、学生がベッドサイドでのケアをする時間の短縮などの変更を余儀なくされた。

福田ら(2006)によると、新人看護職員のリアリティショックを構成する6因子には、『未経験の機器やケア』や『患者の死亡や急変』という看護基礎教育の中で経験することが難しい因子が含まれていた。新人看護職員のストレスに関して、卒後3か月時点のストレスの要因は「自分の能力不足」が最も高かったことが報告されている(小野田ら、2012)。臨地での実習期間の大幅な減少に伴い、実践への適用能力獲得の機会が減少した卒業生にとって、臨床で

勤務をする不安の大きさは計り知れず、「自分の能力不足」をより強く実感しリアリティショックにつながる恐れがある。さらに、内野ら(2015)は、文献検討より、全ての研究対象者に共通した新人看護職員の離職要因は、リアリティショックだったと述べていることから、臨地実習の期間減少が、結果的に、新人看護職員の離職を促すことが懸念される。

また、病院に勤務する新卒看護師のうち、就職後3か月時点でリアリティショックに陥っていると思われるものは65%を超えていた一方で、就職後6か月時点で、リアリティショックが改善した群は、改善していない群と比較して看護技術に関する苦痛が有意に改善していた(水田、2004)。すなわち、看護技術は、ストレスの要因でもあり、卒業後のリアリティショックを乗り越える要因でもあるといえる。

Covid-19に限らず、今後も大規模な感染症の拡大は起こりうると思われており、看護学の臨地実習の実施が、影響を受ける可能性は続く。感染症拡大の影響を受けた学生の臨床現場への適応を促すためには、卒業前の不安や教育のニーズを明らかにし、教育機関が行う支援のありかたを検討する必要がある。しかし、Covid-19に伴う臨地実習の影響を受けた学生が、卒

業後にどのような影響を受けたかの調査はまだ少ない。

そこで、卒業する学生に向けた技術指導のありかたを検討するためには、感染症の拡大の影響を受けた看護学生の卒業前の不安や教育へのニーズ、卒業後への影響を明らかにする必要があると考えた。

## II. 目的

Covid-19 感染拡大により影響を受けた看護学生を対象に、卒前技術演習で希望する演習内容を明らかにし、また卒業前の技術演習への参加状況の違いによる卒業 3 か月後の不安について明らかにする。

## III. 方法

### 1) 調査対象者

2022 年 3 月に大学看護学科を卒業した学生 76 名を調査対象とした。サンプルサイズの設定根拠は、t 検定は症例数 30 以上が必要であり Mann-Whitney の U 検定は制限がないこと(新谷, 2015)、及び母集団を 76 名の学生、信頼度 95%、許容誤差 5%、回収率 50% で計算した必要サンプル数が 62 であったことから、サンプルサイズは 62 名と設定した。

### 2) 調査方法

無記名自記式調査票による縦断研究とした。2022 年 1 月に、卒業前後で比較可能とするため番号を記載した卒業前調査票と卒業 3 か月後調査票の 2 通を、対象学生に配布した。調査票の回収は、卒業前調査票は、2022 年 1～3 月に鍵付きのボックスにて回収した。卒業 3 か月後調査票は、2022 年 6～7 月に、郵送にて回収した。調査と卒前演習の流れは、図 1 に示した。



図1. 調査と卒前演習の流れ

### 3) 調査項目

卒業前調査(以下、卒前調査と略す): 就職や進学に向けた不安の有無と最も大きい不安の原因 4 項目、状態不安尺度(State-Trait Anxiety Inventory: STAI)(肥田ら, 2000)、卒前演習で実施を希望する看護技術 17 項目、卒前演習への参加希望の有無と参加を希望しない理由 5 項目で調査項目は構成された。STAI は、測定時点での不安の強さを示す状態不安尺度と性格特性としての不安になりやすさを示す特性不安尺度の 2 尺度で構成されている。本研究で使用する状態不安尺度は、ある時点での不安を測定する尺度である。中里ら(1982)が日本版の信頼性と妥当性を検討し、尺度の  $\alpha$  係数は 0.92、十分な信頼性と妥当性を持つことを示した。なお、卒前演習への参加希望の回答内容と実際の演習の参加状況が一致しているかの確認は、実施していない。

卒業 3 か月後調査(以下、卒業後調査と略す): STAI、学生時代に行っておいた方が良かったと考える看護技術 17 項目で調査項目は構成された。看護技術は、卒前調査と同じ項目を尋ねた。

### 4) 分析

卒前調査では、卒前演習の参加の有無による STAI 平均得点を t 検定により比較した。卒業後調査では、卒前演習の参加の有無による STAI 平均得点および卒前調査と卒業後調査の STAI 平均得点の変化量を Mann-Whitney の U 検定にて比較した。統計解析は、SPSS Ver.23 for windows(IBM)を使用し両側有意水準を 5%とした。

### 5) 倫理的配慮

本研究は、奈良県立医科大学医の倫理審査会の承認を受け実施した(承認番号: 3186)。対象者には、調査の目的、データの保管、研究協力の拒否と中断の自由、個人情報保護について、文書および口頭で説明した。調査用紙の投函をもって、同意を得たこととした。

### 6) 卒業前の技術演習(以下、卒前演習と略す)プログラム

本学看護学科教員と看護実践・キャリア支援センター看護師長との協議により、演習プロ

グラムを作成した。事例患者は肺炎を患っており膀胱留置カテーテルを留置中、全身状態の悪化がみられたため、点滴およびレントゲン検査を受ける設定とし、患者に対して、担当看護師は点滴作成と患者への投与、患者の全身状態の観察、検査室まで車いす移送することとした。設定した事例にもとづき、看護師役の学生は、患者役の学生に対し看護技術を実施した。実施した看護技術は注射の指示簿を確認し、アンプルとバイアルから点滴ボトルへの薬液の混注、輸液ルートの接続、点滴の滴下速度の調整、バイタルサイン測定、車いす操作の演習を実施した。

7) 卒前演習の実施体制

卒前演習の参加募集の案内は、調査対象者である大学看護学科の卒業予定学生 76 名全員に対して行い、このうち 46 名が、卒前演習に参加した。演習では、学生は 3~4 名が一組となり看護師役・患者役、見守る学生という形式で実施した。1 回の演習時間は、30 分を目安に行った。演習当日は、看護学科教員 7 名、看護実践・キャリア支援センター所属の看護師長および看護師が、学生への指導を担当した。各グループに最低 1 名の教員または看護師配置の体制で実施した。

IV. 結果

1) 卒前調査

72 名より回答を得た。回収率は 94.7% (72/76) だった。就職や進学不安があると回答した学生は 72 名中 59 名 (81.9%) だった。59 名のうち、最も大きい不安の原因は、看護技術 22 名 (37.3%)、人間関係 15 名 (25.4%)、看護の知識 12 名 (20.3%) だった。不安があると回答した 59 名のうち、Covid-19 感染拡大の影響が、就職や進学不安に影響していると思うと回答した者は、43 名 (72.9%) だった。

① 卒前演習で受講を希望する看護技術 (表 1)

学生に希望する看護技術を複数回答で尋ねたところ、静脈血採血 54 名 (75.0%)、輸液ポンプの操作 49 名 (68.1%)、気管内吸引 46 名 (63.9%)、注射器の取り扱い 45 名 (62.5%)、筋肉注射 45 名 (62.5%)、アンプルの取り扱い

44 名 (61.1%)、点滴の準備 44 名 (61.1%)、等が、希望が多かった。学生の希望が少なかった看護技術は、血圧測定 5 名 (6.9%)、コミュニケーション 1 名 (1.4%) だった。結果は、表 1 に示した。

② 卒前演習参加を希望しない理由

卒前演習の参加を希望しないと回答した学生は 11 名 (15.3%) で、演習参加を希望しない理由は、時間がないが 11 名中 6 名 (54.5%) と最も多かった。

③ STAI の平均得点

回答者全員の STAI 平均得点±標準偏差は 1.94±0.04 だった。卒前演習に参加希望の学生の STAI 平均得点±標準偏差は 1.95±0.30、参加を希望しない学生は 1.83±0.31 だった。卒前演習の参加希望の有無で 2 群に分け STAI 平均得点を t 検定により比較した結果、有意差は認めなかった (p=0.211)。

表 1 卒業前の技術演習で受講を希望する看護技術

看護技術	人数	%
静脈血採血	54	75.0
輸液ポンプの操作	49	68.1
気管内吸引	46	63.9
注射器の取り扱い	45	62.5
筋肉注射	45	62.5
アンプルの取り扱い	44	61.1
点滴の準備	44	61.1
経管栄養	43	59.7
膀胱内留置カテーテル	42	58.3
口鼻腔内吸引	41	56.9
バイアルの取り扱い	39	54.2
一次的導尿	36	50.0
滅菌物の取り扱い	17	23.6
聴診	15	20.8
経口与薬	12	16.7
血圧測定	5	6.9
コミュニケーション	1	1.4

注. N=72. 複数回答.

2) 卒後調査

17 名より回答を得た。回収率は 22.4% (17/76) だった。回答者のうち未記入が多い 1 名を除外し、16 名を分析対象とした。16 名のうち、卒前演習の参加者は 12 名、参加しなかった者は 4 名だった。

① 就職 3 か月間で仕事に対する不安

就職 3 か月間で仕事に対する不安があると回答した者は 14 名 (87.5%) であり、最も不安が大きいと回答した内容は、看護技術 4 名

(25.0%)、人間関係 2 名(12.5%)、看護の知識 2 名(12.5%)だった。

② 卒前演習で受講を希望する看護技術(表 2)

学生に希望する看護技術を複数回答で尋ねたところ、静脈血採血 9 名(56.3%)、気管内吸引 8 名(50.0%)、口鼻腔内吸引 8 名(50.0%)、経管栄養 8 名(50.0%)、膀胱内留置カテーテル挿入 8 名(50.0%)等が、希望が多かった。また、学生の希望が少なかった看護技術は、コミュニケーション 1 名(6.3%)、血圧測定 1 名(6.3%)、聴診 1 名(6.3%)、経口薬の与薬 0 名(0%)だった。結果は、表 2 に示した。

表2 卒業後調査 卒業前の技術演習で受講を希望する看護技術

看護技術	人数	%
静脈血採血	9	56.3
気管内吸引	8	50.0
口鼻腔内吸引	8	50.0
経管栄養	8	50.0
膀胱内留置カテーテル	8	50.0
輸液ポンプの操作	5	31.3
注射器の取り扱い	4	25.0
筋肉注射	4	25.0
点滴の準備	4	25.0
一次的導尿	3	18.8
アンプルの取り扱い	2	12.5
バイアルの取り扱い	2	12.5
滅菌物の取り扱い	2	12.5
血圧測定	1	6.3
コミュニケーション	1	6.3
聴診	1	6.3
経口与薬	0	0.0

注. N=16. 複数回答.

③ 卒業 3 か月後の STAI 平均得点(表 3)

卒業 3 か月経過後の STAI 平均得点±標準偏差は、卒前演習の参加者は 1.95±0.25 点、参加しなかった者は 2.00±0.41 点だった。卒前演習の参加の有無で 2 群に分けて 3 か月後の STAI 平均得点を Mann-Whitney の U 検定にて比較した結果、2 群間に有意差は認めなかった(p=1.000)。結果は、表 3 に示した。

表3.卒業前演習参加の有無によるSTAI得点の比較

	n	STAI得点		
		平均値	標準偏差	p 値
卒前演習に参加した	12	1.95	± 0.25	1.000
卒前演習に参加していない	4	2.00	± 0.41	

注: STAI変化量: 演習前のSTAI得点—演習後のSTAI得点。Mann-Whitney の U検定

④ 卒業前の STAI 得点と卒業 3 か月後の STAI 得点の変化(表 4)

卒業前と卒業 3 か月後の STAI 平均得点の得点差を Mann-Whitney の U 検定にて比較した。その結果、卒前演習の参加者の得点差は 0.08±0.36、参加しなかった者の得点差は 0.14±0.18 で、2 群間に有意差を認めなかった(p=0.316)。結果は、表 4 に示した。

表4.卒業前演習参加の有無によるSTAI変化量の比較

	n	STAI変化量		
		平均値	標準偏差	p 値
卒前演習に参加した	12	0.08	± 0.36	0.316
卒前演習に参加していない	4	0.14	± 0.18	

注: STAI変化量: 演習前のSTAI得点—演習後のSTAI得点。

Mann-Whitney の U検定

V. 考察

1. 看護技術に対する卒業生の不安

卒前調査では、就職に対する不安の原因は、看護技術と回答した者が、最も多かった。Covid-19 流行に伴い実習期間の短縮、学内実習への変更などの対策を講じた臨地実習を経験した看護学生のうち 6 割が、看護技術などの習得に、Covid-19 による影響があったと認識していた(佐藤ら、2022)。一方、臨地実習を担当する教員を対象にした調査(日本看護系大学協議会、2021)によると、Covid-19 による実習代替えによる実習目標の到達状況について、知識に関することは、臨地実習時と同程度からそれ以上が 72.2%であったが、技術に関することは、同程度からそれ以上は、24.2%に留まっていた。Covid-19 流行により臨地実習期間や方法が変更された結果、学生にとっては、看護技術を身に付けることが難しい環境であった。就職に対する看護技術の不安が最も高いとの回答者が多かった背景には、実習で看護技術を取得する機会が、感染症拡大前よりも乏しかった状況が影響していると推測される。

就職後 3 か月時点で実施した卒後調査では、就職に対する不安の原因は、看護技術と回答した者が、最も多かった。小野田ら(2012)は、

新卒看護師の入職後 3 か月時点では、判断した看護方法を具体的に実行する力量がないと感じる傾向が、入職後 6 か月時点と比較して有意に高かったと報告している。看護方法を具体的に実行する力量が無いと感じる傾向と、本研究で明らかになった看護技術に対する不安の高さは、新卒看護師は看護技術の実践に対してなかなか自信が持てないという同じ傾向を示していると考ええる。

また、卒前演習で受講を希望する看護技術は、卒前調査、卒後調査ともに、静脈血採血、吸引などの診療技術の希望が多かった。血圧測定やコミュニケーションなどは、実習で実施する機会が多い。しかし、静脈血採血、吸引などの診療技術は、看護基礎教育検討会(2019)が提示した看護師教育の技術項目の到達度でも、実施が困難な場合は見学する技術項目に分類され、臨地実習中で実施する機会は、ほぼ皆無である。それにも拘らず、臨床ではすぐに実施する必要に迫られることが多いことから、卒前調査では演習希望者が多かったと考える。新人看護職員が、看護基礎教育で経験をしたことがない看護実践や、技術の未熟さ、初めて行う診療援助の方法が分からないことに困難を感じていることが報告されている(飯倉ら、2023; 田中、2022; 滝島、2017)。つまり、卒業後、就職して 3 か月時点では、点滴や注射などの診療技術を一人で行うことを任されるようになるが、上手く対処できずに能力不足を実感するという困難に直面している時期である。このため、卒前演習では、診療技術の実施への要望が高かったと考える。

卒業前 STAI 得点は、卒前演習の参加希望の有無にかかわらず有意差は認めなかった。また、今回、参加しなかった理由は、都合により参加できないとの回答が最も多かった。演習参加を希望しない学生は、不安を強く感じていないというよりも、演習に参加を希望しなかった学生も、演習参加者と同様に不安を感じていたが、都合が合わないために参加を希望しなかった可能性が考えられる。

卒業 3 か月時点での STAI 得点は、演習参

加により有意差を認めなかった。また、卒業前と卒業 3 か月時点での STAI 得点の変化量に有意差を認めなかった。卒前演習を実施したことで、看護師になる実感はわいてきたが(吉川ら、2024)、1 回だけの演習では経験したにとどまり、看護技術の習得には、至らなかったと考える。また、新人看護職員が、夜勤で不安な看護技術として、点滴、注射、採血があげられた(畠山、2009)。点滴、採血、などの診療技術は、安全に確実に実施できるように習得するまでには、経験や時間が必要であるが、今回の卒前演習では、実施しなかった。このため、演習参加の有無で不安に有意差を認めなかったと考える。

## 2. 看護技術に対する不安を軽減するための卒前演習のあり方への示唆

今後は、輸液の準備、車いす操作、バイタルサイン測定に加え、学生の演習の要望が高かった静脈血採血、吸引などの診療技術を卒前演習に取り入れる必要がある。水田(2004)は、就職して 3 か月後にリアリティショック反応を示したが改善していない新人看護職員は、看護技術に対する苦痛の予想も高く、できないだろうという予想のもとに、やはりできないといった苦痛がおこると指摘している。そして、卒業前に少しでも技術に対し自信をもって卒業することで、ショックは和らげられると考えられると述べている。看護学科教員やキャリア実践支援センター看護師の指導の下、演習を行うことは、1 回でも経験したという学生の気持ちの余裕につながると考える。さらに、学生が技術に対して自信をもって卒業できるためには、自由に技術練習ができるような演習場所や機会を学生に提供することも、検討する必要があるといえる。

また、今回の卒前演習は、時間がないために演習に参加を希望しない学生も認められた。国家試験が終了後、卒業式の前までで、学生が参加しやすい日程について、学生の要望も踏まえて技術演習を開催する必要性が示された。

## VI. 本研究の限界と課題

卒業 3 か月後の調査票の回収率が低かった。就職後の 3 か月では回答する余裕もないと思われ、配布から回収まで期間が長いことも要因

であると考え。回答しなかった多数の卒業生の実態を把握するためには、郵送だけでなくWEB 調査の活用など調査票の回収方法を検討する必要がある。

卒前調査では、卒前演習に参加を希望しないと回答した学生は 11 名だったが、実際は、26 名が不参加であった。不参加の理由は、予定変更が推測されるが、確認をしていない。また、参加者に対しては、調査で参加希望の有無について回答内容を確認していない。より多くの学生が演習に参加できるように、今後は、実際に演習に参加しなかった学生の理由を確認する必要がある。

本調査の学生は、Covid-19 感染拡大の影響を受けた一方で、教員が影響を最小限に抑えるために様々な配慮と教育が行われた学生たちでもある。このため、感染拡大前よりも、学生は看護技術が習得できている可能性がある。これより、本研究で検討した不安は、感染に関係なく認められる学生が卒業前に抱く不安をみているに過ぎない可能性が否定できない。このため、今後は、感染拡大前の卒業前の不安や卒業 3 か月後の不安と、本研究の結果を比較する必要がある。

## VII. 結論

Covid-19 感染拡大により臨地実習の実施方法に影響を受けた看護学生を対象に、卒前演習で希望する演習内容を明らかにし、また卒業前の演習への参加状況の違いによる卒業 3 か月後の不安について明らかにすることを目的に、調査を行った。その結果、学生が就職進学に関して不安を感じる内容は、看護技術と回答した者が最も多く、卒前演習では、より高度な看護技術の演習を希望する学生が多かった。卒前演習の参加の有無による 3 か月後の STAI 平均得点の違いには、有意差を認めなかった。今後の卒前演習の項目は、実習では扱う機会が少ない、より高度な看護技術とする必要性が示された。

## 謝辞

本研究の実施に際し、ご協力をいただきました全ての皆様に感謝申し上げます。

本研究における利益相反は存在しない

## 文献

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会：“看護学教育モデル・コア・カリキュラム” 文部科学省 2024-09-05.

[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf) (accessed 2024-09-05)

福田敦子,花岡澄代,喜多淳子他(2005): 病院に就職した新卒看護職者のリアリティショックの検討 潜在構造の分析を通して. 神戸大学医学部保健学科紀要,20: 35-45.

畠山なを子(2009): 新人看護師の夜勤を通しての職場適応. 岩手看護学会誌,2(2): 25-37.

肥田野直,福原眞知子,岩脇三良他(2000): 新版 STAI マニュアル,実務教育出版.

飯倉涼,恩幣宏美(2024): 新人看護職員が看護基礎教育で経験したことがない看護実践に対する困難を乗り越えるプロセス. 日本看護研究学会雑誌, 46(5): 791-798.

看護基礎教育検討会：“看護基礎教育検討会 報告書” 厚生労働省 2024-09-06.

[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_07297.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html) (accessed 2024-09-06)

水田真由美(2004): 新卒看護師の職場適応に関する研究 リアリティショックと回復に影響する要因. 日本看護研究学会雑誌,27(1): 91-99.

中里克治,水口公信(1982): 新しい不安尺度 STAI 日本版の作成女性を対象とした成績. 心身医学,22(2): 107-112.

日本看護系大学協議会 看護教育質向上委員会：“2020 年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査” 日本看護系大学協議会 2024-09-05.

<https://www.janpu.or.jp/2021/04/30/18506/> (accessed2024-09-05)

小野田舞,内田宏,津本優(2012): 新卒看護

- 師の職場適応とその影響因子に関する縦断的研究. *日本看護管理学会誌*,16(1): 13-23.
- 佐藤亜美,大國慧,坂根可奈子他(2022): 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策を講じた臨地実習を経験した看護学生の認識調査. *島根大学医学部紀要*,44: 27-33.
- 新谷歩(2015): 今日から使える医療統計,第一版:医学書院.
- 滝島紀子(2017): 新卒看護師が直面する看護実践上の困難点とその対処法に関する研究. *川崎市立看護短期大学紀要*,22(1): 57-69.
- 田中広美(2022): 急性期病院に勤務する新卒看護師が直面する困難と就業継続にむけた支援のありかた. *日本看護学教育学会誌*,32(1): 65-77.
- 内野恵子,島田涼(2015): 本邦における新人看護師の離職についての文献研究. *心身健康科学*,11(1): 18-23.
- 吉川あゆみ,山田晃子,小津有輝他(2024): COVID-19 感染拡大により影響を受けた看護学生に対する卒業前技術演習プログラムの評価. *奈良県立医科大学看護研究ジャーナル*,20: 38-48.